

## 哲学史と思想史の交叉

J・イスラエルの「論争に焦点を当てる方法」は哲学・哲学史研究にとっても有効でありえるのか

津田栞里(一橋大学)

Q・スキナーによる思想史の方法論への批判、そして以降の論争は、「思想史とは何か」に留まらず、「哲学史とは何か」という課題を突き付けるものであったといえよう。例えば、R・ローティは、Q・スキナーに代表される文脈主義に与する思想史研究の立場を「歴史的再構成」と名付けると、その立場に対してテキストの内在的批判によって超時代的な問いの抽出を目指す哲学・哲学史研究の立場、つまり「合理的再構成」を峻別する。他方、J・イスラエルは「論争に焦点を当てる方法」によって啓蒙の世紀を描き出し、同時代におけるスピノザの重要性を示した(Israel 2001)。彼によれば、自らの研究は歴史学のアプローチを採用する思想史と哲学の接近の試みであるという。近年は J・イスラエルの研究成果に導かれるかたちで、哲学・哲学史研究者の多くがスピノザを補助線とする近代哲学史の読み直しに挑んでおり(Dyck 2018; 2019, 加藤 2022, etc.)、J・イスラエルの啓蒙研究とその余波は思想史研究のうちに哲学的意義を見出すことを否定する Q・スキナーの主張に対する一つの批判的応答と評価しうるものである。

では、これらの事例をもって、思想史と哲学史の接近は十分に示されたといえるのか。あるいは、「論争に焦点を当てる方法」は哲学・哲学史研究にとっても有効であると結論することはできるのであるか。いずれの問いに対しても、現時点で有力な回答が提示されているとはいいがたい。そこで本発表では、J・イスラエルが提唱した「論争に焦点を当てる方法」の内実を確認した上で、その方法論の有効性を検討する。その際に私たちが注目するのは、J・イスラエルが考察対象とした啓蒙の世紀において「論争に焦点を当てる方法」を用いることがスピノザ及びスピノザ主義をめぐる論争に焦点を当てることとおおよそ同じであるという点である。それゆえ、本発表は思想史の方法が哲学・哲学史研究に有効であるかを検証するという哲学史全体にかかわる問いを有する一方で、18 世紀を中心とする近世/初期近代哲学史研究の立場から近年流行するスピノザ/スピノザ主義に注目した哲学史の読み直しへの反省を試みる。そして、本発表が直接的に取り組むのは後者の課題、つまり「18 世紀を中心とする近世/初期近代、あるいは啓蒙の世紀において、なぜスピノザ/スピノザ主義という視点が、思想史研究だけでなく哲学・哲学史研究にとっても有効であったのか」という一つの問いにほかならない。

先述のとおり、スピノザ/スピノザ主義への注目、あるいはスピノザ/スピノザ主義をめぐる論争への注目によって、哲学史を読み直すという試みは近年散見される。しかしながら、加藤が指摘するように、ドイツにおいては 19 世紀の時点ですでにスピノザは哲学史記述における一つの参照軸として機能していた(加藤 2022)。つまり、ハイネ(Christian Johann Heinrich Heine, 1797-1856)による『ドイツ古典哲学の本質』、及びシェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)による『近世哲学史講義』において、スピノザはカントそしてヘーゲルへと連なるドイツ哲学史のカウンターパートとして機能しているのである。この事実は、「なぜスピノザ/スピノザ主義が当時の論争の中心にいたのか」、換言すれば、「スピノザ/スピノザ主義に注目して 18 世紀を中心とする近世/初期近代哲学史を読み直すことは

いかなる意味をもつのか」を解明するための手掛かりとなろう。

以上の問題意識のもとで、本発表は検討の対象をドイツに限定し、J・イスラエルが提唱した「論争に焦点を当てる方法」、つまりスピノザ/スピノザ主義に注目して読み直された哲学史とはどのようなものなのかを、ハイネやシェリングによる記述との比較によって検討する。それは同時に、スピノザ/スピノザ主義が何を前景化したのかを明らかにするはずであり、「なぜスピノザ/スピノザ主義という視点が、思想史研究だけでなく哲学・哲学史研究にとっても有効であったのか」という問いへの一つの仮説的回答が準備されるであろう。

## 参考文献

- Dyck, Corey W. 2018. Between Wolffianism and Pietism — Baumgarten's Rational Psychology, 'Baumgarten and Kant on Metaphysics, Courtney D. Fugate and John Hymers (ed.), Oxford: Oxford UP, 78-93.
- , 2019. *Early Modern German Philosophy (1690-1750)*, Oxford: Oxford UP.
- Israel, Jonathan, 2001. *Radical Enlightenment*, Oxford: Oxford UP.
- R・ローティ, 1988. 『連帯と自由の哲学:二元論の幻想を超えて』 富田恭彦訳, 岩波書店.
- Skinner Quentin, 1978. *The Foundations of Modern Political Thought*, Cambridge: Cambridge UP. (クエンティン・スキナー, 2009. 『近代政治思想の基礎——ルネッサンス、宗教改革の時代』門間都喜郎訳, 春風社.)
- Tully, James (ed.), 1988. *Meaning and Context: Quentin Skinner and his Critics*, Oxford: Oxford UP. (クエンティン・スキナー, 1990. 『思想史とは何か:意味とコンテキスト』半澤孝磨・加藤節編訳, 岩波書店.)
- 加藤泰史, 2022. 「「スピノザと」読み解く近代ドイツ哲学史」, 加藤泰史編『スピノザと近代ドイツ:思想史の虚軸』, 岩波書店, v-xxii.